

清真人「池田大作の思想について改めて考える」講座の準備資料

*なお、この講座に参加する方は「近畿大学学術情報リポジトリ」にアクセスし、清講師が今年 2026 年 3 月に近畿大学・日本文化研究所の「紀要第九号」に寄稿した論文「池田大作の『対話』思想とイエスの『愛敵』思想とを、またヴェーバーの『天職としての政治』とを、架橋し媒介する試み」(「シリーズ マルクス主義の終焉を如何に引き取るべきか? (3)」というシリーズタイトルの下に)を検索し、そこからご自分のパソコンにダウンロードしてお読みください。無料でアクセスできます。

第一回 池田大作は社会主義者だったのだ!——池田大作の「人間性社会主義」実現を目指す社会変革論、その今日の問題性

池田は、1964 年に、公明党創立に合わせて、その創立の意義を明らかにすべく、鳳書院より『政治と宗教』を出版し、日蓮の「立正安国論」を現代に引き継ぐ思想として「人間性社会主義」と彼自身が名付ける「新社会主義」論を展開し、同年、創立された公明党は、その党綱領にこの「人間性社会主義」を自分たちの政治的立場を規定する概念として掲げた。それは、ソ連・中国・北朝鮮に典型化した《スターリン主義の独裁主義的全体主義的社会主義》を強く批判するとともに、「現行の自由主義経済を基調にするが、現代資本主義に顕在化する人間疎外や不平等・格差拡大などの不備欠陥是正のため」に社会主義理念の正しき良き側面を引き継ごうとする立場、及び日本国憲法第 9 条を頂点とする平和主義を断固擁護する立場、この二つを統合した、一言でいえば、「社会民主主義」の最良形態を目指す立場と見做し得るものであった。

重要な問題とは、この彼の「人間性社会主義」論が、公明党の右旋回——一九八一年の公明党第一九回大会で「新安全保障政策」として「日米安保是認、自衛隊合憲」へと転換したことに端的に示される——と共に、この右旋回を是とする創価学会と公明党の内部の勢力によって、あたかもそもそも無きが如き処遇を受けることになったことである。

だが、トランプ/高市連合が日本国憲法の平和主義を破棄する改憲を企てつつある現在、創価学会の創始者たる池田大作の思想の上記の側面をクローズアップし、再浮上させることは緊急の課題となっている。そう私は考える。

資料： 1983年1月25日 第8回「SGI（創価学会インターナショナル）の日」での池田の「記念提言」： 私どもは、これまで恒久平和主義を掲げた日本国憲法を一貫して守り抜く姿勢をとってまいりました。それは単に日本一国のためというより、平和憲法の精神と理想とを、あらゆる国々、あらゆる民族の心に植えつけ、戦争放棄の人間世界を広げることこそ、恒久的平和への確かな道と信じているからであります。私が日本国憲法の擁護運動を若き青年、学生に託したのは、憲法自体が国家という枠を超えて人類全体に対する信頼感に貫かれているからにほかなりません。第九条を憲法に盛り込むことによって、歴史の流れを先取りした英知と先見は、やがて歴史がはっきりと証明していくであります。

第二回 現代人の「小我」的在りよう（己を絶え間なく他者と対立し闘争せざるを得ない孤立人と考える）を、「大我」視点（大宇宙の有機体的統一性に満ち溢れた在りようへの注視）を媒介に、「相互扶助」の喜び・「自然との深き共生」が生む安息感・「個性的自己実現」への愛、この三者を総合した新しき社会主義的在りようにつくりかえるという、池田の「人間革命」戦略の概要について

創価学会機関誌『大白蓮華』の2025年9月号に掲載された青森県の地区女性部長を務める三浦優華の寄稿文の一端を紹介したい。（「何があっても明るく前へ 子どもたちは太陽の存在」28～31頁）

（前略…）私が幼い時、両親は病弱な妹につきつきり。特に父は妹に優しく、やんちゃな私にはとても厳しくて、父のことが大嫌いでした。信心強盛な家族でしたが、父への反発で学会活動から遠ざかっていました。…（中略）…夫は未経験の仕事になじめず、毎日「やめたい」とこぼしていて、私も夫のために祈り始めました。…（中略）…長男の陽翔^{はると}は幼稚園に入っても自分の思いをうまく表現できず、ことばの教室（言語通級指導教室）に通い始めました。しかし、教室の先生の一言にがくぜんとなりました。「息子さんの吃音は治らないでしょう」と。泣きながら題目をあげ続けていると、ある晩、夫から「子どもたちも心の支えになるものがあった方がいいんじゃないか」と言われたのです。…（中略）…実は夫も、幼い頃吃音で苦しみ、人一倍、陽翔^{はると}の気持ちがあったのかもしれない。その後、3人目を妊娠しましたが、夫は入社から9年経っても一度も昇進せず、家計はギリギリ。安産と経済革命を賭けて対話拡大と唱題に励みました。…（中略）…入会記念勤行会には、父も参加してくれました。父は当時、指定難病の全身性アミロイドーシスなどを患い、余命5年を宣告されていました。発病後、父は唱題や御書の研鑽などに一層励むことで、人柄がどんどん柔らかくなっていました。子どもを連れて会いに行くと、これまでの時間を埋めるように穏やかに話すことができ、心の中のわだかまりが解けていきました。…（中略）…陽翔^{はると}

思春期に入ってイライラが強くなり、字が上手に書けなくなりました。昨年、発達障がいの一つの、限局性学習症の書字障がいと診断されましたが、医師からパソコンやタブレットなら問題なく勉強できると言われました。中学校や教育委員会などと何度も話し合った末、授業、課題、試験の全てでタブレット端末を使えるようになったのです。長女の陽向は明るい子ですが、今年の1学期の途中から体調を崩して学校に行けなくなりました。さまざまな検査の末、脳にのう胞があることが分かりました…
(後略) (傍点、清)

なお、以上の証言に対して、私は前述の池田論の中で次のように書いた。――

私の中に湧き起こるのは次の想いだ。問題を煮詰め、最も先鋭な形で、かつ昨今益々眼に着いてきた現象に繋げて表現するならこうだ。――自殺に到りかねない程の無力感(「宿命」意識)と自己否定感情と孤独意識(そもそも誰よりも近く、応援者であり、愛護者であり、悦び手であるはずの親からの理不尽な暴力、侮蔑等が強いる絶望的孤独感とルサンチマン)、更には「学校」という小社会に出れば、学友からの蔑視や極端な「仲間外し」、そこから改めて突き戻される自分の生まれながらの身体欠陥や「醜さ」、等。それらが産む自殺するほか無しとの苦悶。他方では、この自己否定に追い詰められた苦悶とルサンチマンを爆発させ晴らす意義を瞬時といえど孕むところの他殺へ到る程の憎悪と復讐衝動、かかる自殺と他殺とが二重になった殺人志向(=「生命」否定の実存様態たる孤独(「誰でもいいから、殺して、自分の人生を終わらせたかった」との或る殺人犯青年の言葉に象徴される、清)、**だが**、まさにそれを根底から「革命」し、他者への愛と自己への愛、その二つの「生命」愛が実は一つに縊り合わさったものだということの発見・覚醒に、まさに一転して跳躍するということ、これが問題なのだ、と。まさに革命が問題となるのだ!

しかもその際、かかる生命愛は、大宇宙に漲る「生命」力が自他に汎神論的に映現したものだと思え直す「体験＝発見」によって裏打ちされ、支えられ、新しく獲得された感受性と思索の全体システムが新たな解放的な明るみに輝き出すということが(一言でいえば、共苦・同苦の力に促された他者愛・慈悲愛の発揮が、まさにそれが欠如していると思われ憎んでいた相手にも再発見されるという経験が)――まさに創価学会の日蓮宗的・大乘仏教的な教理による説明を通して――起きるということ、かくて、人生に対する体感的でもあれば知的でもある新展望の獲得が、だからこそ自己再生(人間革命)の端緒＝契機の獲得たる意義を持ち、それを会員に為さしめる「座談」の〈場〉、それこそが我々が創価学会なのだという集団的自負が改めて漲り出すということ。こうしたことが問題の要なのだ!

そして、これから私が論じる《池田大作の「対話」主義》に関連付ければ、右記の如き、汎神論的性格を帯びた「実存革命」としての「人間革命」、これを会員各自にもたらさんとすること、それこそが池田にあって「対話」が担うべき第一の任務とされ、「対話」がいわば学会活動の背骨と位置付けられたことの根拠なのだ! 繰り返せば、右記の問題関

連の総体が「人間革命」概念の内容規定なのだ。…（中略）…

なお、最後にもう一点、次の点を私は強調しておきたい。

—だから、池田にあつては、資本主義社会が民衆に強制する「所得」の不平等（まさに資本家階級が己のものとする莫大な資産収益といわば「無産」者民衆の貧困極まる低所得との不平等）に対する民衆の怒りが、資本主義社会を社会主義社会に「革命」する場合の精神的燃料の何よりもまず第一の燃料層とされるのではなく、それだけでなく、しかも或る点ではいっそう重要な燃料層として、まさに民衆の内面に疼く「人間革命」としての「自己革命」の精神的欲求が注視されねばならないとされるのだ、と。だからまた、我々が希求すべき「社会主義社会」は、まさに上記の「人間革命」を全ての民衆にもたらしうることができる社会、すなわち「人間性社会主義」の社会と呼ばれなければならない、と。

まずここで、池田の「人間革命」論の要点を把握するために、まさにそれをズバリと提起するところの、彼の『立正安国論講義』2の第一章における彼自身の言葉を引こう。

彼はこう主張する。「大乘仏教の真髓」は、今日、世界においてただ日本の創価学会のみがその「実践」に邁進しているところの、日蓮の「立正安国論」にだけ受け継がれたのであり、それは次のように要約される、と¹。

各個人にあつては、偉大なる宗教は、第一に、偉大なる人間革命をもたらす。人間革命とは、精神革命（精神分析的深みをもった、清）であり、身体革命であり、生命力、生活力の革命であり、人間自体の革命であり、生命自体の偉大なる革命である。

偉大なる宗教は、第二に、かならず各人の「福運」を増進させる働きをもつのである。いかなる悪運も、いかなる不運も、最高の宗教は、かの「大我」の生命観に立脚した生命哲理によって、宿命を本源的に転倒させ、福運を、良運を与えきって行くのだ。世に運命論者と称する人もあり、逆に運命それ自体を否定する人も多いが、いずれも誤りである。運命論者のいうごとく、人が生まれながらにして、定まれる運命がありとするならば、人生における努力や精進は、まったく無意味となってしまうではないか。また、だからといって、運命それ自体を否定するのは、人生のきびしさを知らぬ考え方であり、人生を真剣に思索すればするほど、運命の存在を肯定せざるをえない。

良き運命は変える必要はない。そしてなおいっそう増進したいものだ。しかし、悪しき宿命は転換して、福運に変えていかねばならない。この宿命の転換は、偉大なる宗教によつてのみ、達成できるのである。

第三に、偉大なる宗教は、大いなる智慧を發揮させうるのである。以信代慧、すなわち信心を以て智慧に代えるとは、仏法の偉大な偉大な哲理である。仏界（宇宙の有機的統一性、清）を湧現させることが、大仏法の極致であり、偉大なるご本尊を信ずることによって、仏智を湧出させうるのである。智慧は、人生を勝ちぬく要諦である。しかし、

¹ 池田大作、『立正安国論講義』2、聖教文庫、一一九、一九七八年、聖教新聞社、一五～一七頁

この智慧は、けっしてたんなる知識やその集積ではないことを付言したい。

第四に、偉大なる宗教は、各人に偉大なる思想、哲学を与え、偉大なる社会観、人生観、世界観を身につけさせるのである。…(中略)…しかも思想、哲学といっても、偏狭で、非科学的な不合理なものであってはならない。道理正しく、科学的で、人類すべてに普遍的であり、あらゆる人を成長させうるものでなければならない。われらは、かかる優れた思想、哲学の根源こそ、偉大な宗教であり、日蓮大聖人の仏法であると主張するものである。

第五に、偉大なる宗教を奉ずる者は、諸天善神の加護をうけることができる。諸天とか善神といえ、現代社会にあつては、迷信のごとく感ずる人もあるかもしれない。しかし、それは仏法における生命の哲理…(中略)…絵像木像の神仏などをもって、諸天善神となすものでなく…(中略)…諸宇宙にみなぎる生命を育み、慈しむ働きをさして、仏法では諸天善神の働きというのである。

以上、偉大なる宗教が、振興する個人にいかなる影響を与えるかを考察してみたのであるが、これは家庭にあつても、同じことがいえよう。人間革命しきった人が、家庭のなかにふえればふえるほど、その家庭は、明るく、平和に、充実しきっていくことは当然であり、家庭そのものが、革命された姿になるのである。

第三回 池田の捉える日本仏教史と「人間性社会主義」との「共振」関係について

——日蓮の「立正安国論」に根差す仏教の「正法」に基づく社会変革こそが「安国」(現代的に言い換えれば、「人間性社会主義」社会)をもたらすとの思想

最近の或る拙稿から抜粋

日蓮の「立正安国」思想と法然・親鸞「専修念仏」思想との対立関係の所在に関する島菌進の見解(彼の『日本仏教の社会倫理 正法を生きる』(岩波現代文庫、二〇二二年)についての私の読書ノートから。傍点、清):島菌は、仏教の原点にあるアショーカ王のエピソードの決定的意義を確認する。同書第1章を織りなす小章の一つ「仏教ははじめから『社会参加仏教』だった」にいわく。——「アショーカ王は戦争で多くの人々を殺し、そのことを悔いて仏教に帰依し、正法の支配する平和な帝国を形成しようとした。政治がもたらす暴力を、正法を具現するサンガ(僧集団のこと、清)は清める働きをもつ。仏陀はそもそも王であることをやめて、不殺生の道を歩むべく出家したのだ。出家することが平和を目指す社会参加の行為という側面をもっていたのではないか」。そのうえで、島菌は日本での浄土教という仏教の在り方をこう批判的に特徴付ける。——思想的には法然以後、組織的には室町期以後、日本仏教は宗派主義を強めていく。個人としての檀越(だんおつ)を尊び、彼らの悟りや救いのための説法に力が入れられ、統一サンガとして仏教的生の範を示し、正法の具現体となるという側面が弱化していった。それはまた、社会的暴力や平和を実現するといった共同目標に取り組むという側面が見えにくくなり、あくまで個人としての「苦」やその原因である煩惱(ぼんのう)を見つめるのが仏教だという考え方が優位を占めるようになる。島菌いわく。「救われない個人であること

を痛切に自覚して、ひたすら阿弥陀仏(あみだぶつ)の慈悲にすがり信を確立する。日本浄土教においては、これが宗教的実践の根幹と見なされた。そこではこの世に正法の支配がもたらすことは問題にならず、戒律を厳格に実践する出家者集団(サンガ)も求められない。そして、島藪は改めてこの問題提起する。——「法然は国家社会での『正法』の支配を目指す仏教から、国家社会はさておき、とにかく個人の極楽往生を目指す仏教への転換をラディカルに主張した」わけだが、しかし、現在我々は改めて「この転換がもった意味を、『正法』理念に注目しつつ捉え返す必要がある」と。そして、この問題の文脈において、島藪は、これまでの「日本仏教理解」に絡みついてきた通念を端的にこう批判する。いわく、その理解においては、「鎌倉仏教思想の太い流れが、法然、親鸞、一遍らの浄土思想、念仏思想にあったことを疑う者は稀である」が、まさにこの点で我々が認識しなければならない問題とは、この「浄土教信仰者において、正法理念は重い意義をもっていない」という点である、と。というのも、そもそも「浄土教の隆盛」を惹き起こしたいわば精神情況的要因それ自体が、「現世での正法具現を断念しつつ個人々の救済(死後に住まう「あの世」を「地獄」とするか「浄土」とするか、清)に関心を集中する」という問題意識の構え、それが多くの仏教指導者の意識を捉えたことにあつたからだ、と。そして、この問題意識の構えといわば真っ向から対立するという対の関係において、まさに日本仏教史における「日蓮による正法復興運動」の意義がテーマライズされねばならないのだ。島藪の同書の第V章の「二 日蓮による正法復興運動」はまさにこの問題を論ずる章であつた。

資料(或る拙稿から)：池田大作の『新・人間革命』の第16巻の冒頭の章「入魂」では、「総体革命」という概念をこの新しき「社会主義革命」思想(「人間性社会主義」)を特徴付ける概念として提起し、それを説明して、主人公山本伸一(池田大作のいわば代役・替え玉たる、清)をして次のように語らせた。すなわち、それは日蓮の「立正安国論」思想の「現代的表現」といえるものであり、「つまり、どこまでも人間を原点とし、仏法によって社会建設の主体である人間を変革する、人間革命」の働きを指す概念である。すなわち、「人間こそ、社会を形成する基盤である。ゆえに、人間の生命が変革されれば、それは、人間社会の営みのすべてに反映される」という問題の関連、それを指示する概念である、と²。(なお、指摘だけしておく。池田にあつてかかる日蓮の「立正安国論」思想への高評価は、法然——親鸞が自分こそは彼の思想を最も正しく受け継ぐ直系の弟子と見做した——浄土教への低評価と一体になっていたことを)

第四回 池田の「対話主義」に支えられた、創価学会の支部活動イメージについて

——互いの体験を生々しく語り合う「対話」の場、それが生み出す「自己変革意欲(己の苦悶してきた「宿命」の「転換」可能性への気付き)」と「社会変革意欲」との生きた統合の場、それこそが支部会だ！

² 池田大作『新・人間革命』第16巻、聖教新聞社、二〇〇六年、二四頁

なお、このテーマに関しては、私が最近書いている論稿の一部を、皆さんに紹介させていただく。

ここで、私は島藺進『日本仏教の社会倫理 正法を生きる』（岩波現代文庫、二〇二二年）の次のくだりを紹介しておきたい。島藺の創価学会への関心は実に鋭い。彼は、創価学会運動の基盤をなす、「家庭集会」を機軸に据えた、まさに「在家主義」に徹した創価学会の「御講」活動について、次のように論じている。すなわち、——明治維新以前は、正統派仏教（天台・真言宗）はもとより、たとえ浄土真宗系統でも日蓮宗系統でも、僧侶中心主義に立つ「出家主義」であり、僧侶（出家者集団）よりも「在家」、すなわち一般民衆こそが「仏教実践の主体」であるとの認識には達していなかった。だが明治期になると、^だ「法華＝日蓮系仏教運動」にあつては、^たんに「在家の積極的な参加や主体的実践を説くだけでなく、出家者集団に対する在家こそが仏教実践の主役であること」が説かれるに至った³。そう指摘した上で、島藺は、こう続ける。

——「本門仏立講」の活動形態の特徴は、まず一般信徒の積極的参加を促すことであり、そこでは、『御講』とよばれる小集団が組織され、また『妙講一座』と呼ばれるところの、分かりやすく唱えやすい礼拝様式が整えられ、『現証利益』^{げんしょうりやく}が強く勧められる。すなわち、信仰実践によって病気が快癒する、貧窮から解放される、対人関係の困難が解決するなど、この世の実際生活がより過ごしやすくなるものになり、幸せを実感できるものになることが、会員の証言を通して繰り返し例示され、また、『お供水』^{おこうすい}とって『仏前にお供えした水を飲むことで病気の治療を図る救済実践が行なわれた』と。また、『御講』^{おこう}で交換された『現証利益』^{げんしょうりやく}の体験談を武器に、どんな信徒も他者を信仰仲間へ引き込むこと、すなわち積極的に布教実践をすることが促された」と⁴

なお、島藺は、こうした運動形態は、創価学会運動に先立つ久保角太郎を指導者にする霊友会がまず発案したものであったことを指摘し、その特色として次のことを挙げた。すなわち、久保は、「国家救済ビジョンについて明示するのを避け、庶民の日常生活の切実なニーズに焦点を合わず、病気や仕事や家族の問題など、私的な問題の解決に力点を置き」、かつ「個人が自己変革を通して運命改善を実現することの革新的意義を強調した」と。そして、島藺は、この点を「教義よりも信仰体験を重んじる体験主義や、それを通し

³ 同前、256頁。

⁴ 同前、257頁。

て個々人の自律が実現される、というある種の個人主義の主張である」と指摘し⁵、更にこう続けている。——それは、「在家の信徒すべてが各家庭で熱心な信仰活動を送るだけでなく、集団活動に積極的に関わることを促すもの」であり、「信徒は身近な人々を勧誘し（『お導き』という）小さな集団で家庭集会（『供養会』『法座』と呼ばれる）をもち、そこでは、参加者はこもごも自らの深刻な悩みや信仰体験について語り合い、やや規模の大きな『説法会』などでも信仰を始めたばかりの者も含めて壇上から体験談を語る」こととなり、「在家自身が主体となる新たな仏教教団という自覚が強く示される」こととなった、と。そして、こう指摘する。——「この時期に成功を収めた『座談会』という下からの参加を促す家庭集会の様式は、第二次大戦後、創価学会と改称して爆発的な展開をとげる時期の活動形態を準備するものであったことは言うまでもない」と⁶。

最後に一言。

私は思う。日本における左翼系の諸運動の支部組織はこの創価学会の「御講」や「家庭集会」を貫いている方法論——互いの生々しい「体験」の率直なる「対話」による交換こそが、これまで自分を苦しめてきた孤独感に満ち満ちた辛き「宿命」感情を、その根底から覆す新たな共生感情・連帯感の昂揚を生み出すのだ、とする——に学び、これまでの上位下達主義に支配された自分達の支部組織の在りようを、今こそ決定的に転換すべきである！ と。

第五回 改めて、かつての「創共協定」プロジェクト挫折の深き意味を問い直そう！

資料 拙論の池田大作論（近大紀要に寄稿した）から
——補論3 山下文男『共・創会談記』の告げるもの

山下が紹介した、毎日新聞に二ヶ月連載する企画で構想された宮本顕治と池田大作との「人生対談」の、その内容企画についてどんな準備討論が為されたのか、それをうかがい知るために山下が書いていることを紹介しよう。そのごく一部だが。

山下はこう書いている。

「対談」の準備は三月中旬から始まり、まず毎日新聞社側から四十八項目にわたるプラン、双方からもそれぞれ独自のプランが持ち寄られる。…（中略）…この作業にともなう受け渡しは実に十五回に及ぶ。次に宮本委員長側の当初プランと、池田会長側から紹介されたプランを紹介する。池田会長側の案は六十九項目にわたる大変意欲的なもので、もしこれが実現すれば、一日一項目としても六十九回の連載が必要であった。もちろん、これは双方協議の

⁵ 同前、270 頁。

⁶ 同前、278 頁。

結果、内容も変化し、もっと短いものとなったが、それでも、こうしてほぼ合意したプランは、ゆうに二ヶ月の連日の連載は必要とする内容であった⁷。

そして、当初案（宮本委員長側から提出した「対談」プランの）は次のようであった、と。そのごく一部だが、雰囲気を知ってもらうために同書の記述からその一部を引用しよう。

一、創価学会の最近の動向について ①池田会長の講演（一昨年、昨年）②共産党はこう見る。 二、平和とファシズム、①平和と核の問題 ②ファシズムと日本の政治 ③軍国主義時代と双方の組織 三、相互の関心 ①私の青春 ②母を語る ③私の信念 四、文化活動 ①文学について ②双方の文化事業 五、組織づくり ①組織づくりの苦勞 ②青年に期待する 六、世界を語る ①池田会長の訪ソ、訪、訪米 ②日本共産党の国際活動 ③世界の指導者 七、日本の将来 一今日の危機をどう見る ②政治と宗教、双方の理想 ③未来への展望⁸

他方、池田会長側からは、こうであった⁹。（実に具体的で、如何にも組織論の勘所を余さず列挙したそれであった。まさにそれをぶちまけることによって聴衆の「それが聞きたかった」という学習意欲を一挙に独占するが如き）

一、組織論 I、組織の基本は何か 2、組織の理想的なあり方、 3、組織に活力を与えるものは何か 4、組織を嫌う一般的傾向について 5、組織悪をどう乗り越えるか 6、組織の地域性 7、組織の中の世代隔差をどう解決するか 8、オルガナイザーの資質
二、指導者論 1、指導者が孤独になったとき、何を考え、どうしようとするか 2、指導者として最も真剣に考えている事 3、指導者としての共通点 4、指導者としての支え 5、全体に影響をおよぼす問題について最終的決断をするときの厳しさ 6、後継者をどう育成していくか 7、権限の委譲と責任について 8、人材発掘法と育て方
三、文化論 1、文学を志した動機 2、文化の役割、使命 3、革命とロマン 4、日本の文化、花鳥風月 5、万葉集と日本の民族性 6、日本人論 7、西洋と東洋とのものの考え方の違い 8、地域文化、伝統文化をどう生かすか 9、人間の創造性をどう開発していくか 10、文明の生氣の本源 11、テレビ文化。劇画をどうみるか 12、レジャーをどう生かすか
四、青年論 1最近の青年の傾向 2、今の学校教育に欠けているもの 3、政治的無関心の増大 4、管理社会、現代のファシズムをどう乗り越えるか 5、歴史上の若い指導者で好きな人物 6、若い人々との接触と意見の吸収 7、幼児教育のあり方 8、現代青年に読ませたい本 9、青春時代における友情のあり方
五、人生論 1、人生で苦しかったこと、悩んだこと、幸福を感じたこと 2、試練、難

⁷ 同前、八七頁

⁸ 同前、八七～八八頁

⁹ 同前、八九～九〇頁

- 関をどう乗り越えたか 3, 座右の銘は何か 4, 生きるということの意味 5, 運命、宿命について 6, 人間にとって死とは何か 7, 来世があるとすれば何に生まれたいか 8. 生きることと思想の関係 9, 年代による心境の変化 10、人間の資質において最も大切なもの 11, 人間の欲望をどうコントロールするか 12, 生命の不思議
- 六、女性論 1、日本文化と切り離せない母親、婦人の役割について 2, 新しい家庭のあり方 3, 家庭教育における母親の役割 4, 働く婦人の問題 5, 愛するということ 6, 恋愛と結婚 7, 女性の本当の美しさ 8, 女性の強さと弱さ 9, 母を語る
- 七、その他 1, 一枚のレコード 2, 家族団欒の時のテレビ番組 3, 好きな歌手 4, 健康管理法 5, 日本人の味覚 6, 好きな言葉 7, スポーツは何をするか 8, 旅行して心に残った場所 9, 好きな花 10, 最近読んだ本 11, 最近見た映画

読者よ！ ここで先の補論2の後半を振り返って欲しい。この様々に対談内容が構想され練り上げられた末に実施された「人生対談」を！ 実際に毎日新聞紙上で読んだ読者が寄せてきた読後感想と、また交わされた「人生対談」の出だしを飾る、両者の出会いのエピソードを！ またそれを語る両者の言葉の行き来の在りようを！

一言でいえば、かの「人生対談」は、対談する兩人にとって真実互いに自分が最も大切にしていた想いを打ち明け合う《対話》だったが故に、それを読む読者にとっても、一言でいえば心躍るものとなったのだ。まるで、彼等の一人一人が同時に読者の自分を対話相手に選び出し、自分に心を開き、話しかけてくるような。

資料2 毎日新聞に連日掲載された【人生対談】の終結部から

5) 「母を悲しませるな」

池田 それでは対談の終わりに、互いの経てきた人生を振り返って——もちろん、これからまだ先がありますが（笑い）——もつとも苦しかったこと、もつとも幸福に感じたことに焦点を当ててみませんか。私自身についていうと、苦しいことの連続で、数え上げればキリがありませんが、その中でも特に苦しかったのは、恩師前会長が亡くなった時ですね。それまでは苦しいといっても、大樹のように前会長が厳然としていましたから…もつとも幸福に感じたのは、恩師の後を継いで七年、当初の目標をすべて達成できたときですね。それと、……日本中、いや世界中どこへ行っても、志を同じくし、人間革命に、社会の変革に闘う人々がいる。そして、その人たちの幸福に満ちた力強い姿を見るときなど、何ものにも代えがたい生きがいを覚えます。

宮本 私の場合「もつとも」という限定はつけがたいのですが、苦しかったことはいろいろあります。成人してから非常に苦しかったことの一つは、一九五〇年の党の分裂と運動の混乱で多くの人々の心が傷ついた時でした。子供の時としては、中学のはじめに、……家が破産状態になって……正直者で子供思いではあったが非常に短気な父が、苦しま

ぎれに大酒をのんでわめきちらし、ときには母親を殴りつけたりするのを見て、たまたま母をかばいました。田舎のことですから、そういう騒ぎは、たちまち近所に知れわたるので、私は恥ずかしくて……この少年時代のつらさは子供心に重いものでしたが、いま考えると、社会に目を開く一つの条件になったようです。……深い悦びだった一つは、終戦の年の秋、治安維持法が廃止された報を獄中で聞いた時です。この悪虐な法律で……日本中が牢獄化されて、国民全体がまともに口をきけない状態でしたから、やはり、最後に、正義は勝つのだ、という感慨を繰り返さざるをえませんでした。網走刑務所の門を出た時の心持ちも忘れられません。それまで十二年間……いつでも手錠をかけられ、……監獄の中でも、監房の外へ出る時は必ず編笠をかぶらされていました。自由に空を仰ぎ、手を振り、一人で思うところに行けるということは、それ自体すばらしいことでした。……

池田 お母さんのご苦勞は大変なものだったでしょうね。人間にとって本当の苦しみというのは、自分自身のことよりも、家族や家族同様に愛している人の苦しみ悲しむ姿を見ることではないかと思うのです。特に男というのは……特に母親の苦しむのが何よりこたえます。

……（中略）……

池田 母親が苦しみにじっと耐えている姿というのは何より胸を打たれるし、こたえます。その意味でミケランジェロの有名な「ピエタ」という作品は、子であるイエスの死を悲しむ母親の姿をとらえている。人間の心理を実に鋭く突いているといえますね。私の場合、やはりいちばん苦しかった思い出の一つは、母が、四人の子供を次々と戦争にとられ、特に長兄が戦死したことを知らされた時の、ガックリ肩を落とした姿で、もうそのときの情景と心象は、生涯忘れることができません。このころから、母はめっきり老け始めたようです。……その母をこんなに悲しませる戦争など、いかに理屈をつけようが、絶対に許すべからざる悪魔の行為である——とどまることのない憤りが体の中を逆巻く思いでした。私の生涯の目標である戦争反対、世界平和の信条は、母の姿から受け取ったものといってよいかもしれません。……

宮本 弟たち二人とも兵役にとられ、次弟は原爆で死にましたが、遺体もわからない状況でした。私は網走の刑務所で、母や妻の手紙でそのことを知りました。……戦争は私たちの世代の多くの母親に取り返しのつかない深い傷を与えました。核戦争反対、核兵器の全面禁止を私は公人として叫んでいますが、そこには原爆で息子を失った母の声も含まれている思いです。

池田 お互いに母のことを語り合って、人生対談の結びになりましたね。